農業を中心とした生活をする人々の労働観―ある家族のライフヒストリーと行動記録を事例に―

渡部　鮎美（千葉県）

本発表では現代における農業を中心とした生活を営む人々の労働観を彼らのライフヒストリーと参与観察から得た行動記録を事例に論じる。

先行研究では共時的な視点から農業を中心とした生活を営む人々の働き方の多様性を示してきた。また、近年の研究では通時的な視点でライフヒストリーなどを分析し、個人や地域の労働観を論じている。しかし、先行研究では農業を中心とした生活が家族の手でどのように営まれ、いかに変化をしていったのかが明らかにされてこなかった。そこで、本発表では先行研究で示された働き方と労働観の多様性を一家族のライフヒストリーと日常生活に密着して得た行動記録から論じる。

事例は現在まで農業を中心としながら、様々な生業活動をおこなってきた千葉県富浦町の農家A家とした。調査対象期間は 1960 年から現在までで、現在の生業活動については参与観察をして行動記録を取った。

A家では1960年から現在まで農業を中心としながら、合間にさまざまな生業活動をおこなってきた。A 家の家族は農業の他に日雇い労働や介護ヘルパーなど様々な仕事をしてきた。また、A 家では農業の合間に趣味的な漁撈活動に興じたりもしている。農業を中心としながらも、彼らの生活はもはや農家という枠には収まらないほどの多様な生業活動で埋め尽くされていたのである。

A 家の家族ひとりひとりの働き方もさまざまで、その上めまぐるしい速さで変わっていった。A 家の生計活動の中心となっている農業に関しても、家族の関わり方はそれぞれ異なる。農業経営の上での役割も数年でがらりと変わってしまう。さらに、栽培や出荷の方法も1年ごとに変わっていくので作業も前年と同じことはない。

このように個人のライフヒストリーに着目してみると、生業活動の組み合わせも内容自体も大きく変化している。その上、彼らの一生のなかで農業以外の仕事は次々と変わっていき、一度辞めた仕事を再びすることはなかった。

歴史学や民俗学では生活や人の一生の周期性を示し、生業における家族の役割分担を示すことで人々の暮らしを構造化しようとした。しかし、人々の生業活動の移り変わりは速く、農業や他の生業活動も同一の産業としては捉えがたいほど、規模も内容も変わっていく。その上、農業経営における家族の役割も変化していく。もはや農業は周期性や構造をもった生業やひとつの産業として語ることはできなくなっているのである。

そこで、本発表では生活や人の一生を生業に着目して分析するのではなく、彼らの働き方に注目して論じる。そこで明らかになるのは、多種多様な仕事や活動を行き来する働き方である。そして、彼らの働き方から工場労働のようにひとつの仕事に打ち込むことで達成感を得るような労働観とは異なる労働観を示したい。

キーワード：ライフヒストリー、 生業、 農業、 働き方、 労働観